

名古屋外国語大学論集 第5号 2019年7月

研究ノート

大学生を対象としたリスニングの内容理解と ディクテーションの比較研究 (1)

A Comparative Analysis of the Relationship between Japanese University Students' English Listening Comprehension and Dictation (1)

大岩昌子
Shoko OIWA

赤塚麻里
Mari AKATSUKA

1. はじめに：リスニングとディクテーション

すでに母語の音声システムを獲得している話者にとって、異なる音声体系をもつ言語の連続して入力される音声情報を、音素の識別や音の脱落などにも配慮しながら、正しく言語記号化することは極めて難しい。こうしたリスニングのプロセスは、Richards (1993) が述べるように、音の言語記号としての認知過程と、それをもとに、単語認知と統語構造の知識によって意味理解に至る、二つの過程から成り立っている。またField (1999) によれば、リスニングには、音素→音節→単語→文→主題というボトムアップ処理と、文脈、聞き手の知識、スキーマなどから音声情報を処理するトップダウン処理という二つのプロセスが「同時」に進行するが、ボトムアップ処理による不十分な情報をトップダウン処理で補うなど、相互補完関係にある。また小山 (2009) は、リスニングには音声を認知するスキルと、認知した情報をその統語構造のまま瞬時に理解する「継時処理スキル」と呼ばれる2つのスキルが必要と主張する。

一方、ディクテーションは、学習者により聞き取られた音声情報を文字で再構築するため、客観的な誤答分析が可能となり、学習者による音声的な困難点が浮き彫りとなる。それゆえ、上述のリスニング力の向上、あるいはそ

の評価の手段として有効ととらえられてきた。特に日本人学習者の欠点を補うために、Satori (2010) は、まず音を正確に言語記号化することに集中させるべきとする。また、ディクテーションでは語彙力や統語構造を含めた文法力まで問うことができるとした研究として、例えば、Oller (1971) は、ディクテーションが予測文法力を学習者に与え、英語の総合力を高める方法として高く評価している。また、Heaton (1975) はディクテーションの測定範疇として、音声識別、語彙、文法力に加え、内容理解にあたる聴解力や音声の記憶スパンも挙げている。さらに、杉浦・竹内・馬場 (2002) は大学生を対象としたリスニング力の養成を目的としてディクテーションによる指導を行った結果、一定の学習効果を認めるなど、ディクテーションによるリスニングにおける効果を肯定的に捉える研究は多い。一方、萬谷 (1985) は、ディクテーションと内容理解力について検討するため、160語からなるストーリーにポーズを置きながら聞かせた場合、学習者によって書きとられた文の正しさと、ストーリー全体の内容理解度とがいかに関係しているか、すなわち、文を聞いて書きとるために学習者が理解内容を積極的に利用するといった高度な言語活動を行っているか否かに焦点をあてた興味深い実験を実施している。その結果、内容理解度は低いが誤答数の少ない「音転写指向型」の参加者が多く認められ、その理由として、学習者がディクテーション時に全体の意味把握より個々の単語を正確に聞きとり、書きとる作業に集中する傾向に陥る問題点を挙げている。また、Jafarpur & Yamini (1993) は、ディクテーションの訓練が内容理解などのリスニング総合力には転移しにくく、リスニングの内容理解力の測定にもディクテーションは不適切と指摘する。同じく Sugawara (1999) も、意味理解を目的としてリスニングさせるためには、むしろディクテーションは適さないとしている。こうした結果は、先の小山が、ディクテーションは音声情報の正確な理解を促すものの、「継時処理スキル」の向上には寄与しないと指摘する考察と一致するようだ。以上の先行研究を総合すると、ディクテーションは音声情報の脱落や弱化などに意識を向けながら聞き取ることに集中させる手法により、学習者の聴取力に一定の効果が認められるものの、語を逐一書きとるという方法そのものが要因とな

り、「トップダウン処理」や「継時処理スキル」が適切に機能しなくなる結果、こうした能力を必要とするリスニングの内容把握にディクテーションは寄与しないと推測される。

こうした先行研究を踏まえ、本研究は、まず、1. ディクテーションが実施された文の意味は、はたして学習者によって正確に把握されているのか、さらに、2. リスニングによる瞬時の意味把握の後でディクテーションを実施した場合の結果とを比較検討することにより、ディクテーションをその内容理解の促進に利用するために取るべき手法や学習者への指示の検討を目的とする。また、3. ディクテーション課題は完成された文を音声情報として聞き取り、それを文字情報として書きとる「文の再構築」を目指した課題であるが、本稿では学習者自身が文の構築を行う英作文力との比較検討も研究目的のひとつとする。

2. 調査1

2.1 参加者

英語を専攻とする日本人大学1年生で、「ことばと音声」という授業のひとつを受講している学生を対象としたが、受講生の中で、海外在住経験が3年以上の学生1名と調査に欠席した学生は対象から外した。調査1の開始前に実施した書面による協力確認に同意した学生32名が最終的な分析対象となった。

2.2 調査手順

ディクテーションに使用するストーリー展開のない独立した英文11文は、以下の3点の基準を設けたうえで、『TOEFLテストリスニング問題350』（喜田、2006）から選択した。まず、容易な語彙から構成される基本的な文構造であること、ミニマルペアの音識別の要素を含むものであること、さらに、言語処理には文の長さや記憶力が影響することが予測されるため、書き取る語数は1文中、5～6語以内とし、一文はポーズを置かずに聴取させた。調査手順は以下のとおりである。

1) ディクテーションと意味理解

- ① 英語音声を聞かせ、ディクテーションをさせる(以下、ディクテーション)。
- ② ディクテーションされた英文の意味を日本語で書かせる(以下、意味理解)。

ディクテーションと意味理解の具体的な指示は以下のとおりである。

「今から音声を3回流します。次の手順で行ってください。」(巻末、資料1参照)。

1回目：音声を聞き、空欄に当てはまる単語を書いてください。

ポーズ：15秒

2回目：同じ音声を聞き、その英文の意味を書いてください。ディクテーションしたものを参考にしても結構です。

ポーズ：20秒

3回目：同じ音声を聞き、全体を確認してください。修正も可能です。

なお音声に関しては、米語話者によって自然なスピードで録音されたものを、スピーカーから参加者に提示した。問題は全部で11問であった。

2) 英作文(ディクテーションの1週間後に実施)

ディクテーションと同じ文の日本語から英作文をさせる(以下、英作文)。所要時間は15分であった(巻末、資料2参照)。

以下に、実験手順と実施内容をまとめる。

表1 調査1の実施内容

日程	実施の流れ	調査1 N=32
#1	ディクテーションテスト	①ディクテーション ②意味理解 ③確認 (音声情報あり)
#2	英作文テスト	英作文(音声情報なし)

2.3 採点の評価基準

調査の対象としたディクテーション、意味理解、英作文は各11問であり、1問につき3点、33点満点とした。ディクテーションは、語の脱落、挿入、置換、語順転換などで減点、スペルミスは対象外で採点、英作文は文構造および文法が正しく使用されているかという点に焦点を当て、意味理解は、日本語として意味を成しているかという観点から採点した。

2.4 倫理的配慮

研究目的、実施手順、個人情報の管理、調査参加は任意であること、途中でやめる権利がある旨を説明した上で、同意を得た。また調査の実施報告にあたり、個人を特定できないように配慮した。

2.5 結果

2.5.1 統計的分析

ディクテーション、意味理解と英作文の各得点を比較検討するため、ディクテーション ($M = 24.47$, $SD = 4.54$)、意味理解2 ($M = 19.56$, $SD = 4.67$) と英作文 ($M = 21.19$, $SD = 4.21$) について1要因分散分析を行った。その結果、ディクテーションの得点が意味理解と英作文の得点よりも有意に高かった ($F(2, 30) = 21.07$, $p = .001$)。

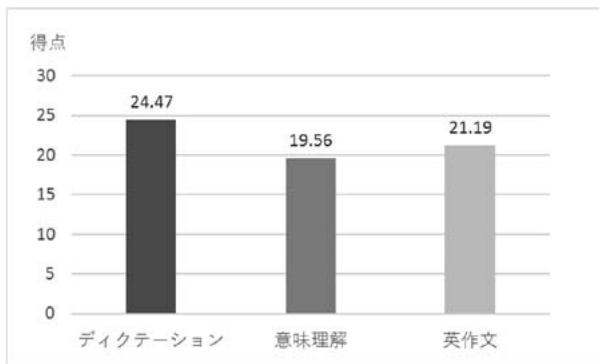


図1 調査1の結果

また、各得点の相関を検討するため、相関係数を算出した結果、ディクテーション ($M = 24.47, SD = 4.54$)、意味理解 ($M = 19.56, SD = 4.67$)、英作文 ($M = 21.19, SD = 4.21$) の得点間には以下のように有意な相関が示された。

表2 各得点の相関

	1	2	3
1 ディクテーション	–		
2 意味理解	.56**	–	
3 英作文	.51**	.50**	–

** $p < .01$

2.5.2 各テストの誤答分析

前項では、参加者のディクテーション、意味理解、英作文の各得点の傾向と関連性を統計的に分析したが、ここでは各テストの誤答例を具体的に検討する。

ディクテーションの誤答として、まず、機能語や文法機能を示す接辞が多い。また、'd like (would like) のリダクションの部分や否定部分の hasn't や mustn't が正確に書かれていない。ミニマルペアの識別では、vote [v] を boat [b]、caught [kɔ:t] を coat [koot] と誤る例が少なからずあった。さらに、career [kəriə(r)] (経歴) を Korea [kəri:ə | -riə] (韓国) と書き取る参加者もいた。音節数、母音の種類を正しく認識できない例として挙げられる。このような誤答例は、Ssali (2018) のディクテーション調査にも同様の結果が示されたことから、日本人英語学習者に多い傾向であるといえる。

参加者のディクテーションと意味理解の得点に相関はあるものの、意味理解の得点がディクテーションの得点と比較して有意に低いという分析結果に示されるように、意味の把握が正確にできていない参加者が多く認められた。また、ディクテーションでは caught と書いているのにも関わらず、日本語では“買った”と訳している参加者や、by her coat は書けているものの、意味が分からないという参加者も多く認められた。

英作文では、例えば、完了形 has registered、否定文中の not、前置詞句 for the

spring semesterの要素が含まれた英文に多くの誤りがあった。その他、時制、3人称単数、語法的な誤り、例えば、vote forをvote toと誤った事例、seldomやdoubtという単語が思いつかないという参加者が多かった。その一方で、I couldn't repair the carは、ディクテーションと英作文において多くの学生が正解していた。全体的に見ると、ディクテーションに多く認められた誤答は、英作文にも同様な誤答が見られた。本稿では、多く見られた誤答例のみを挙げておく（巻末、資料4参照）。

2.6 考察

本調査では、ディクテーションの得点が、意味理解と英作文よりも有意に高かったため、今回の参加者は、ディクテーションが必ずしも意味理解には繋がらない、すなわち「音転写指向型」であることがわかった。さらに英作文の得点が有意に低いことから、文構築も同様に困難であることが明らかとなった。調査2では、まずは参加者が聴解により英文の意味を大まかに把握させたのちに、ディクテーションを実施するといった、調査1とは逆の手順を踏むこととする。

3. 調査2

3.1 参加者

英語を専攻とする日本人大学1年生で、「ことばと音声」という授業を受講している、調査1とは別の学生を調査の対象とした。なお、参加者の中で、海外在住経験が3年以上の学生2名と調査に欠席した学生は分析対象から外した。調査2の開始前に実施した書面による協力確認に同意した学生33名が最終的な分析対象となった。

3.2 調査手順

調査手順は調査1と同様であるが、意味理解とディクテーションの実施順が異なる。

1) 意味理解とディクテーション

- ① 英語音声を聞かせ、英文の意味を日本語で書かせる(以下、意味理解)。
- ② 英語音声を聞かせディクテーションさせる(以下、ディクテーション)。

意味理解ディクテーションの具体的な指示は以下のとおりである。

「今から音声を3回流します。次の手順で行ってください。」(巻末、資料3参照)。

1回目：音声を聞き、その意味を日本語で書いてください(意味理解)。

ポーズ：20秒

2回目：同じ音声を聞き、空欄に当てはまる単語を書いてください。自分の書いた意味を参照しても構いません(ディクテーション)。

ポーズ：15秒

3回目：同じ音声を聞き、全体を確認してください。修正も可能です。

2) 英作文(ディクテーションの1週間後)

ディクテーションと同じ文の日本語から英作文をさせる(以下、英作文)。

表3 調査2の実施内容

日程	実施の流れ	調査2 N=33
#1	ディクテーションテスト	①意味理解 ②ディクテーション ③確認 (音声情報あり)
#2	英作文テスト	英作文(音声情報なし)

なお、採点の評価基準、倫理的配慮、分析方法は調査1と同様に行った。以下に結果を示す。

3.3 結果

3.3.1 統計的分析

ディクテーション、意味理解と英作文の各得点を比較検討するため、ディクテーション ($M = 16.03, SD = 4.41$)、意味理解 ($M = 10.24, SD = 4.58$) と英作文 ($M = 14.24, SD = 4.39$) について1要因分散分析を行った。その結果、ディクテーションの得点と英作文の得点が意味理解の得点よりも有意に高いことがわかった ($F(2, 31) = 37.03, p = .001$)。

また、各得点の相関を検討するため、相関係数を算出した。その結果、ディクテーション ($M = 16.03, SD = 4.41$)、意味理解 ($M = 10.24, SD = 4.58$)、英作文 ($M = 14.24, SD = 4.39$) にはそれぞれ有意な相関が示された。

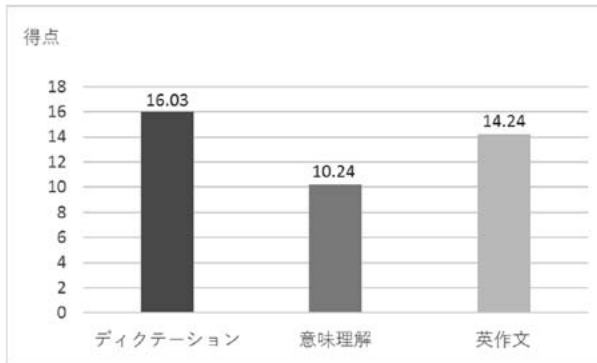


図2 調査2の結果

表4 各得点の相関

	1	2	3
1 ディクテーション	—		
2 意味理解	.61**	—	
3 英作文	.55**	.62**	—

** $p < .01$

3.3.2 各テストの誤答分析

調査2では、調査1と同様の誤答が示されたが、特に、語彙的に難しい語句 *unless, seldom* (程度副詞) が書きとれていなかったことが特徴として挙げられよう。また、意味理解の誤答として、日本語の文法上の間違い(主語と動詞が一致しないこと)や、カタカナのままに訳す例(オリジナルなアイデア、レジスター、ツール等)が多く見受けられた。英作文では、機能語の脱落、動詞の間違い、文構造ができていないことに加え、意味理解と同様、白紙解答も多く見られた(巻末、資料4参照)。

3.4 考察

調査2では、指導的にまず音声により大まかな意味の把握をさせたうえで、個々の単語を正確に聞き、書きとるディクテーションを実施した。これは本来の手順と逆になり、「継時処理スキル」の機能を妨げないことにより、意味把握がより可能となると予測したが、調査1と同様にディクテーションの得点が意味理解の得点よりも有意に高かった。また、英作文の得点とディクテーションの得点には有意差が示されなかった。以上を踏まえて、以下考察する。

4. 全体考察

通常のディクテーションは、完成された文を音声情報として聞き取り、それを正確に文字情報として言語化するといった、いわゆる文の再構築を目指す課題であるため、ディクテーションを学習者に課す際、その意味理解にまで言及することはあまりないようだ。ただ、ディクテーションがいわゆるリスニング力向上の一助を担うものであれば、やはり、意味理解との関りにおいて論じられる必要があるだろう。そこで調査1では、①ディクテーション→②意味理解という順に課題を実施したわけであるが、予測通り、ディクテーションと意味理解の得点には相関があった。ただし、ディクテーションの結果は意味理解よりも有意に得点が高く、やはり学習者はディクテーション課題をこなすことで、「音転写指向型」となる傾向があり、その意味内容にまで注意

が至らないことが推察された。また、補完的に行った、同一の文による英作文の得点は、ディクテーションの得点よりも有意に低いという結果が得られたが、これは当然、統語構造も含めた再構築の方が学習者にとっては容易だということの説明できよう。

一方、調査2は、①瞬時の意味理解→②ディクテーションというように、調査1とは逆の実施順としたが、調査1と同様に、ディクテーションと意味理解の得点には相関性があり、さらに、ディクテーションが意味理解の得点より有意に高いことが明らかとなった。瞬時の意味理解は、いうなれば通常のリスニングであるため、ボトムアップ処理による不十分な情報をトップダウン処理で補完をしながら進行すると予測されるが、10語前後の簡単な英文であっても、ストーリー展開のない、すなわち推測的な聴取のできない短文の意味を瞬時に理解をすることは困難であることが明らかとなった。またディクテーション課題は、意味理解の後に、音声を聞かせているため、調査1と同様の結果となったのは予測の域を超えるものではない。

ところで、両調査とも、ディクテーションと意味理解の課題を行かせた際、各課題のあとにもう一方の課題の解答を修正する時間があつたため、例えば、調査1では②の意味理解の際に、①のディクテーション解答の修正も可能であり、調査2では逆に②のディクテーションの際に、①の意味理解解答の修正ができたわけであるが、実験中の様子では、そうした参加者はほぼ見受けられなかった。

また、調査1と2における結果の相違点は、英作文とディクテーション間の有意差の有無であり、調査1ではディクテーションが英作文よりも有意に得点が高かった一方で、調査2では、ディクテーションと英作文の得点には有意差が示されなかった。この点については、今回実施した各課題において、調査1の方が調査2よりも有意に得点が高かった(図3)ことから、調査2の参加者が獲得したディクテーション課題の得点が低いために、英作文との有意差が得られなかったと推測される。

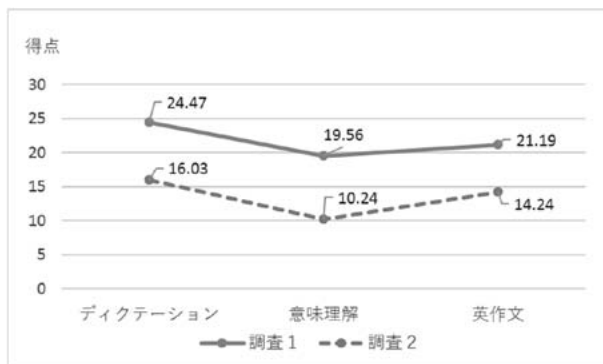


図3 調査1・2の参加者の比較

5. おわりに

本稿は、ディクテーションにより学習者によって書きとられた文意はどのように理解されているのか、これとは逆に、リスニングによる瞬時の意味把握の後でディクテーションを実施した際の各結果に注目した。また、学習者自身が文の構築を行う英作文力と文の再構築を目的としたディクテーションとの比較検討を行うことも目的とした。2つの調査結果から、意味理解とディクテーションの順序は関係なく、ディクテーション得点と意味理解の両者間に相関が得られた。一方、両調査とも、ディクテーションが意味理解の得点を上回る、すなわち、誤答数は少ないものの、意味理解がなされていないという結果が得られたことから、ディクテーションと意味理解の順序はどうか、学習者は音を文字化する「音転写」指向となりがちであり、この点は先行研究を追認する結果となった。

今後は本稿で得られたディクテーションと英作文の誤答に関して、その関連性を詳細に分析することでさらなる知見を得る一方で、提示資料として、ストーリー展開のない短文ではなく、複文や会話文などストーリー性や場面のあるものを使用した実験を実施することで、ディクテーションによりリスニングの意味理解が深まるか検討を続けることにより、当初の目的として掲げたディクテーションをその内容理解の促進に利用するために取るべき手法や学習者への指示を検討していきたい。

謝辞

本調査にあたり、提示用音声の録音にご協力いただいた名古屋外国語大学非常勤講師 Marikit G. Manalang 先生に心より感謝を申し上げる。

参考文献

- Field, J. (1999). Bottom-up and top-down. *ELT Journal*, 53 (4), 338–339.
- Heaton, J. B. (1975). *Writing English language tests: A practical guide for teachers of English as a second or foreign language*. London: Longman.
- Jafarpur, A., & Yamini, M. (1993). Does practice with dictation improve language skills? *System*, 21 (3), 359–369.
- Levelt, W. J. M. (1993). The architecture of normal spoken language use. In G. Blanken, J. Dittmann, H. Grimm, J. C. Marshall, & C.-W. Wallesch (Eds.), *Linguistic disorders and pathologies: An international handbook* (pp. 1–15). Berlin: Gruyter.
- Oller, J. W., Jr. (1971). Dictation as a device for teaching foreign language proficiency. *ELT Journal*, 25 (3), 254–259.
- Richards, J. C. (1983). Listening comprehension: Approach, design, procedure. *TESOL Quarterly*, 17 (2), 219–240.
- Satori, M. (2010). The effect of teaching phonetic information through repeated practice of dictation and reading aloud in L2 listening class. *Language Education and Technology*, 47, 159–180.
- Ssali, V. L., Akatsuka, M., & Doi, S. (2018). English dictation ability among Japanese college students. *Bulletin of the Faculty of Letters of Aichi Gakuin University*, 47, 33–42.
- Sugawara, Y. (1999). Dictation and listening comprehension: Does dictation promote listening comprehension? *Language Laboratory*, 36, 33–50.
- Ushiro, Y., & Sakuma, Y. (2000). Modifying reading and listening span tests for group testing. *JLTA Journal*, 3, 67–82.
- 小山義徳. (2007). 「継時処理スキル：日本人英語学習者においてリスニング成績上位群と下位群を分ける技能」 *JALT Journal*, 29, 231–242.
- 小山義徳. (2009). 「英文速読指導が日本人大学生の英語リスニング能力の伸長に与える影響の検討：ディクテーション訓練との比較」『日本教育工学』32(4), 351–358.
- 角山照彦. (2008). 「映画を活用したディクテーション演習の効果について：英語教育における日本語字幕の影響の有無と今後の課題」『英米文化』38, 95–115.
- 喜田慶文. (2006). 『TOEFL テストリスニング問題350』改訂新版 (TOEFL® iBT テスト大戦略シリーズ) 旺文社.
- 杉浦正利・竹内彰子・馬場京子. (2002). 「リスニング能力養成のための自律学習：ディクテーションの効果」『名古屋大学言語文化論集』23(2), 105–121.
- 米崎啓和. (2014). 「ディクテーションは高校生のリスニング力を伸ばすか：リーディング力・文法力の高い集団を対象とした実証研究」『中部英語教育学会』43, 43–50.
- 萬谷隆一. (1985). 「ディクテーションが測る言語能力：内容理解とディクテーション」『中国地区英語教育学会研究紀要』15, 21–27.

付録

資料 1：調査 1 のディクテーションテスト

実施について

今から音声を3回流します。次の順で行ってください。

- 1回目：音声を聴き、空欄に当てはまる単語を書いてください。
- 2回目：音声を聴き、その英文の意味を書いてください。
- 3回目：全体を確認してください。修正も可能です。

1回目

	ディクテーション
例	(When did the Holts move) to Arkansas?
1	He () .
2	() about the matter.
3	() tomorrow.
4	She () .
5	Nancy () semester yet.
6	I'm sure () Mary.
7	() left.
8	() without the proper tools.
9	John () late.
10	You () are invited.
11	You () idea.

2回目

	意味
例	いつホルルト家はアーカンソー州に引っ越したのですか？
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	
10	
11	

解答

	ディクテーション
ex	(When did the Holts move) to Arkansas?
1	He (caught her by her coat) .
2	(I'll talk with the student advisor) about the matter.
3	(She'd like to see the movie) tomorrow.
4	She (began her career as a teacher) .
5	Nancy (hasn't registered for the spring) semester yet.
6	I'm sure (he is going to vote for) Mary.
7	(I doubt the train has already) left.
8	(I couldn't repair the car) without the proper tools.
9	John (seldom comes to class) late.
10	You (mustn't visit her unless you) are invited.
11	You (shouldn't have changed your original) idea.

資料2：英作文テスト

実施について

以下の和文を英文に直してください。

	和文
例	いつホールト家はアーカンソー州に引っ越したのですか？
1	彼は間違いなくメアリーに投票するでしょう。
2	ジョンは授業にめったに遅れません。
3	適切な道具がなかったので、私は車を修理できませんでした。
4	彼女はまず教師として人生 (career) のスタートをきった。
5	あなたは最初の考えを変えるべきではありませんでした。
6	そのことについて、学生指導教員と話してみます。
7	ナンシーは春学期の履修登録をまだしていません。
8	招待されない限り彼女を訪ねてはなりません。
9	電車がすでに出発しているのは疑わしいと思う。
10	彼女は明日その映画を見たいと思っている。
11	彼は彼女のコートをつかんだ。

* 英作文テストはディクテーションテストの順番と変更し、ランダムに作成した。

資料3

調査2

ディクテーションテスト

実施について

今から音声を3回流します。次の順で行ってください。

1回目：音声を聴き、その意味を日本語で書いてください。

2回目：音声を聴き、空欄に当てはまる単語を書いてください。

3回目：全体を確認してください。修正も可能です。

1回目

	意味
例	いつホルルト家はアーカンソー州に引っ越したのですか？
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	
10	
11	

2回目

	ディクテーション
例	(When did the Holts move) to Arkansas?
1	He () .
2	() about the matter.
3	() tomorrow.
4	She () .
5	Nancy () semester yet.
6	I'm sure () Mary.
7	() left.
8	() without the proper tools.
9	John () late.
10	You () are invited.
11	You () idea.

資料4：誤答例

以下は学生による解答をそのまま記載している。

正解	
Nancy (hasn't registered for the spring) semester yet. ナンシーは春学期の履修登録をまだしていません。	Nancy (hasn't registered for the spring) semester yet.
ディクテーションおよび意味理解の誤答 (調査1)	
英作文の誤答 (調査1)	
誤答例	
Nancy (hasn't register the spring) semester yet. ナンシーは春期のとうろくをしていない。	Nancy (haven't registered the spring) semester yet.
Nancy (hasn't registered for the spring) semester yet. ナンシーはまだ春学期の申し込みをしていない。	Nancy (hasn't applied for the spring) semester yet.
Nancy (hadn't register for this bring) semester yet. ナンシーはまだ学期をとるための登録をしていなかった。	Nancy (has not register to take classes spring) semester yet.
Nancy (has a register for the spring) semester yet. ナンシーは春休みまでに登録する。	Nancy (hasn't register class in spring) semester yet.
Nancy (hasn't register for the spring) semester yet. ナンシーはまだ春期の履修登録をしていない。	Nancy (haven't decided a spring) semester yet.
Nancy (has a register for the spring) semester yet. ナンシーは春のセメスターにまだ・・・。	Nancy (hasn't registered for the spring) semester yet.
Nancy (hasn't registered for spring) semester yet. ナンシーはまだ春期に登録していない。	Nancy (msnt registered spring) semester yet.
Nancy (hasn't register for the spring) semester yet. ナンシーはまだ・・・。	Nancy (hasn't spring) semester yet.
Nancy (hasn't registered fro) semester yet. ナンシーはまだ登録していない。	Nancy (has not registered) semester yet.
Nancy (hasn't a register half) semester yet. ナンシーは半期の登録していない。	Nancy (did not record spring) semester yet.
Nancy (hasn't an legistered for spring) semester yet. ナンシーは春期のレジスターをまだやっていない。	Nancy (is still nont resislate) semester yet.
Nancy (has register for the spring) semester yet. ナンシーは春の履修をとうろくしていない。	Nancy (hadn't done register of schedule for spring) semester yet
ディクテーションおよび意味理解 (調査2)	
英作文(調査2)	
Nancy (has register red) semester yet. ナンシーは赤い卒業をすでに登録された。	Nancy (has registered for spuring) semester yet.
Nancy (has register spring) semester yet. ナンシーはまだ春学期に授業があります。	Nancy (doesn't) semester yet.
Nancy (has registered for spring) semester yet. ナンシーはまだ春学期に登録していない。	Nancy (hasn't classes subscribe this spring) semester yet.
Nancy (hasn't register spring) semester yet. (白紙回答)	Nancy (has not decided class) semester yet.
Nancy (has been register spring) semester yet. ナンシー	Nancy (hasn't done the spring) semester yet.
Nancy (hasn't register for spring) semester yet. ナンシーはまだ春学期	Nancy (doesn't do resignment of) semester yet.
Nancy (has register) semester yet. ナンシーは	Nancy (don't finished) semester yet.
Nancy (has a registered spring) semester yet. ナンシーは	Nancy (haven't class regist about spuring) semester yet.
Nancy (has a registar for the spring) semester yet. ナンシーは春学期の成績をもう持っている。	Nancy (hasn't register classes spuring) semester yet.
Nancy (has not register at spring) semester yet. ナンシーは春期の単位をまだとっていない。	Nancy (doesn't take spuring) semester yet.
Nancy (has the register) semester yet. ナンシーは春期にまだいいぞうこを持っていなかった。	Nancy (don't select subject yet of spuring) semester yet.

正解	
John (seldom comes to the class) late. ジョンは授業にめったに遅れません。	John (seldom comes to the class) late. ※ seldomのほか rarely, hard to も正解
ディクテーションおよび意味理解 (調査1)	英作文 (調査1)
誤答例	
John (is seldom count class) late. ジョンはほとんど授業をちこくする。	John (rarely go to class) late.
John (sold class cou) late. ジョンは授業に遅れた。	John (rarely be class) late.
John (thousand comes to the class) late. ジョンはクラスに来るのが遅かった。	John (rarely go to the class) late.
John (seldam come class) late. ジョンはめったに授業に遅れない。	John (seldom be) late.
John (thought class) late. ジョンはクラスに遅れたと思った。	John (hardly comes to class) late.
ディクテーションおよび意味理解 (調査2)	英作文 (調査2)
John (comes to the class) late. ジョンは遅れて教室へ来る。	John (is rarely) late.
John (sound a class) late. ジョンが遅れていると聞いた。	John (larely class) late.
John (seldom class) late. (白紙回答)	John (rarely delay the class) late.
John (seld on class) late. ジョンは	John (is seldom in class) late.
John (thought class) late. (白紙回答)	John (rarely is) late.
John (comes class) late. (白紙回答)	John (isn't rarely) late.